合った時、最初は腹を立てても、最初は納得できなくても、あるいはこれで仕方がないのかなと諦めても、我慢や辛抱という気持ちで通っても、どこかに必ず親神様の思召があるはずだと、なんとかそれを見つけよう、親心を悟ってたんのうの心を治めようという努力をし続けることが大切であり、それこそがたんのうの心が治まり、ふしから芽が出る御守護を頂戴することに繋がっていくということではないでしょうか。大事なことは、節から芽が出る御守護を頂戴しようと思えば、たんのうの心を治める努力を続けなければならない、ということだと思います。

◆若者の丹精の大切さ◆

私はこれから先、この道を通ってくれる若い人たちに対して、しっかりと教えを伝えていくということはどうでも必要なことだと感じています。教祖が教えて下さった親神様の御教え、この教えの中身は時が流れても決して変わることがない、不変であると信じています。とは申しましても、時が経ち時代が流れますと、教えの中身が変わらなくても、教えを聞く側、私たち人間の側の常識に変化が現れてしまいます。昔の人なら分かったはずの言葉が分からなくなったり、理解できた感覚が理解できなかったり、ということが年々増えてきているようにも思います。そこで、分かりやすくしようとするがあまり、教えの中身が変わってしまったり、教えの厚みが薄くなってしまったり、ということになってはいけないように思うのです。

そうならないように、教えを人に伝える側の私たちがしっかり気をつけるということは、もちろん大事なことであります。と共に、これから道を通っていってくれる若い人たちに、しっかりと教えを学ぶ機会を与えるということも必要なことだと思えてなりません。この教えをまとまった期間、しっかりと学ぶということが、これから先の道にとって、必要なことになってくると考えます。そのためにも、おぢばにあります学校を活用して頂きたい。

中でも、高校や大学を出てから、お道のことを専門に学ぶ、天理教校の専修科や、本科実践課程、研究課程というところを上手に活用して頂きたいと思うのであります。いずれも二年制ですが、こうしたところで学ぶ若者が、ここ数年の傾向を見ておりますと、減っている。お道のことを専門に学べるところで学ぶ若い人たちが減っていくということは、私は将来を考えると、大変気になるのです。

本人が通りたい道を通らせるということもあるのかもしれませんが、それだけではなく、親や教会の会長さんが、その子の将来を思って、通ってもらいたい道を勧めるということも、私は大切なことだと思います。これから道を通る若い人が、そうした場所で、お道のことをしっかり学ぶということは、本人にとって必ずプラスになると思います。

今、こうした時代だからこそ、若い人が若いうちに親里で教えをしっかり学び、身に付ける時間を持つということが、より大切になっていくように思います。それがなければ、学ぶ時間や学ぶ量が十分でないままに年齢を重ねてしまう。そうしたことが積み重なりますと、人様に伝える教えの中身が知らず知らずのうちに薄くなってしまう恐れさえあるように思います。

次の時代を担う信仰者を育てていくということは、末代かけて陽気ぐらしに向かって歩みを進めていくための、必須条件だと思います。一人でも多くの若者が、おぢばでしっかり教えを学んで、教えを身につけて、そして自分の持ち場立場で道を通ってくれることができるように、お互いに声を掛けさせて頂きたいと思うのであります。おぢばがこうした若者で賑やかになるということは、この道が活気づくことに繋がっていくと私は信じているのであります。

◆親神様の思召を求める◆

親神様がお望み下さいます陽気ぐらしの世界を実現するということは、並大抵なことではありません。どれだけ私たち一人ひとりがそうなりたい、陽気ぐらしが実現したらいいなと思っても、陽気なことばかりに出合う毎日にはなかなかならないのであります。一見陽気に受け止められない出来事に出合った時、我々はお道の教えを知っていながら、ついついその出来事を人のせいにしたり、周りのせいにしたり、あるいは社会のせいにしたり、自分以外のせいにばっかりしていることはないでしょうか。果たしてそれで、明るい陽気な心が生まれてくるのでありましょうか。

陽気ぐらしの実現を目指すには、自らが陽気ぐらしを心がける姿勢を周りに移していくことが大切であります。あの人は、口では良いことを言っているけれど、日頃の態度は全然違うんだということでは、周りに何も映らないでありましょう。陽気ぐらしへの歩みを進めるためには、自分が親神様の思召を求めて通る、自分が教祖のひながたを心に持ち続ける、そうした努力を日々続けるということが一番大切なことだと思うのであります。どうかそうした通り方、毎日の過ごし方ができるお互いになることができるように、共々に努力をさせて頂きたいということをお願い申しまして、今日の私の話とさせて頂きたいと思います。